

2003年度宇都宮大学公開講座「コミュニティ入門」を終了するにあたって

中村祐司（担当教員。国際学部）

今回の公開講座では、教員側が一方向的にしゃべるのではなく、社会経験豊かな受講生からの発言を促し、取り上げたテーマについて思う存分語ってもらうよう心掛けた。受講生の話に耳を傾けることで、教員にとっても学部の学生からは得られないような視点や情報を獲得する機会を持つことができるからである。

その意味で「コミュニティ入門」は、少人数のメリットも相俟って、双方が大上段に振りかぶらずに、日常生活において身近なレベルから感じられるところのものを素直にぶつけ合う場となったはずである。

しかも、ありがたいことにいずれの受講生もコミュニティ活動の経験・蓄積を有しており、現場における実践のレベルで言えば、教員と受講生の立場は逆転していたともいえる。地方分権論にしても、市町村合併に伴う地域自治制度の構築にしても、机上の空論で分かったようなつもりになっても、実践者から見ればその難しさや課題が山積していることを肌で感じていることが、説明に対する反応からも窺うことができた。

そして、受講生から出される地に足の着いた意見に、教員側がいかにもひとりよがりの理解をしていたか、気づかされることも多かった。日常の授業や学内外の仕事に忙殺される中、敢えて前期の「地方自治体入門」と合わせて、公開講座を前・後期開講する原動力はこの点にこそあるのかもしれない。

以下の文章は、そうした教員側の思いを受講生がどのように受け止めてくれたかを示すものである。毎回の公開講座の後半、活発な意見の展開に引き込まれ、あっという間に最終回が近づいてしまったこともあり、今回は特定の対象について資料を収集し、調べ、それを調査研究という形にしてみようということにはしなかった。

しかし、今年度「コミュニティ入門」を開講し、受講生と充実した時間を過ごすことができた何らかの足跡あるいは痕跡を、一過性の記憶ないしは思い出としてやり過ごすのではなく、電子媒体上に残しておきたいという強い思いもあった。

私が担当する公開講座の今後はまだまだ未知数ではあるものの、一步一步前に進んでいく勇氣だけは持ち続けていきたいと考えている。後年、以下のページを読み返した時に、困難な政策課題に立ち向かう元気を与えてくれるであろうと確信をもって言えるからである。

2003年12月9日